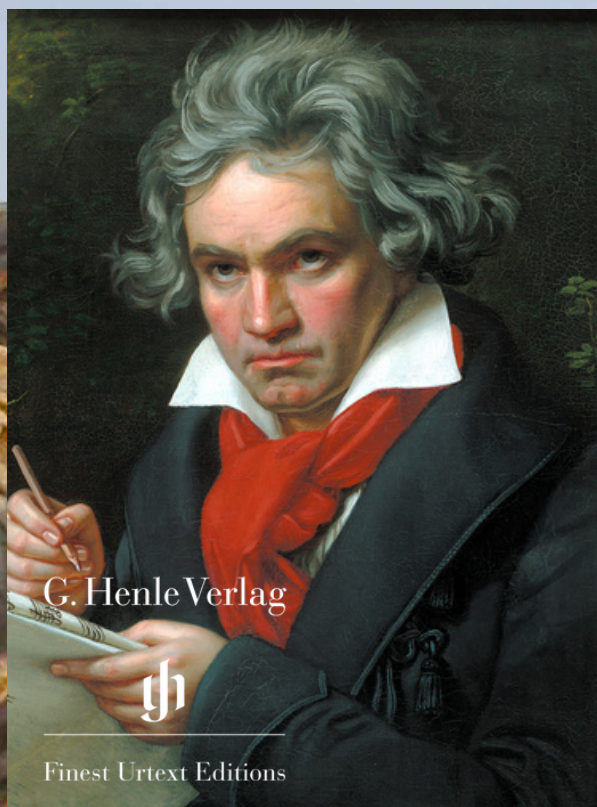


L. V. ベートーヴェン

ピアノ協奏曲 OP. 61 A



この作品は ...

- 現在とても人気が高いヴァイオリン協奏曲 Op. 61の編曲ですが、ヴァイオリン独奏はピアノ演奏技術を想定しすぎた「演奏不可能」なものと批判されていました。
- この2つの作品は、結婚祝いとして親友のシュテファン・フォン・ブロイニングとその妻ユーリエに捧げられました。ユーリエは趣味ながらもピアノの名手でした。
- 以前はピアノ版の信ぴょう性が疑問視されていました。長い間、印刷版とピアノ版の写譜しか知られていなかったためです。
- 自筆譜は存在しません。ヴァイオリン協奏曲の自筆譜にベートーヴェンが書き込んだ内容がピアノ版のスケッチであると認められ、それによりピアノ版がベートーヴェンによる本物と確定したのは、1970年代になってからでした。

ヘンレ版について

- ベートーヴェン全集に基づいています。
- 第1楽章の大きなカデンツァに加え、第3楽章に向かう即興的な経過部と導入部も収録しています。

音楽的な特徴

- 第1楽章のカデンツァはティンパニを伴っています。
- ピアノの音域は4点へまでありますが、この高さの音は1810年以前のピアノには存在しません。

Beethoven

Urtext

Klavierkonzert Opus 61a
Nach dem Violinkonzert Opus 61
Klavierauszug

Piano Concerto op. 61a
After the Violin Concerto op. 61 · Piano Reduction

作品成立の経緯

- ムツィオ・クレメンティの要請で、1807年4月から7月にかけて作曲されました。
- 当時クレメンティは、ヴァイオリン協奏曲 Op. 61を含むベートーヴェンの作品すべてをイギリスで出版する権利を購入しました。